

大澤謙二とデーデルライン

—大澤の遺品から

西川 輝昭

デーデルライン (Ludwig Heinrich Philipp Döderlein, 1855-1936) は、1879 (明治12) 年11月からちょうど2年間、お雇い外国人教師として東京大学医学部予科で動物学と植物学を教えた (磯野、1986、クライナー・田畑、1992、西川、1998、西川・ショルツ、1999)。日本列島の海産動物相の解明に貢献し (上野、1982、磯野 (訳)、1988、Nishikawa、1999)、日本初の恒久的臨海実験所 (現、東大所属) が三浦半島三崎に創設される端緒を作るなど (磯野、1986)、海洋生物学分野で忘れられないドイツ人である。『国立科学博物館ニュース』第369号 (2000年1月号) の特集でもその業績が取り上げられている。

その彼を日本に招いたのは、デーデルラインが一時助手として在籍していたこともあるシュトラスブルク大学に、1878 (明治11) 年から留学していた大澤謙二である (西川・ショルツ、1999)。大澤謙二 (1852-1926; 図1; 以下大澤と呼ぶ) は三河国宝飯郡当古村 (現在の愛知県豊川市当古町) の出身である。彼にとって2度目の留学であるシュトラスブルク大学では、ゴルツ教授 (Friedrich Leopold Goltz) の下で生理学的研究を行い「ドクトル」試験に合格して1882年に帰国後、すぐに東京大学教授となった (医学部で生理学を担当)。その後、帝国大学医科大学長、貴族院議員などを歴任し、1915 (大正4) 年に67歳で大学を勇退するまで日本の生理学の創始者として活躍を続けた (東大生理学同窓会編、1979、所収の解説による)。

筆者はこのたび、お孫さんである大澤雄三氏 (横浜市在住) のご厚意で大澤の遺品を概観することができた。そのなかから、シュトラスブルク (現在、フランスのストラスブール) やデーデルラインにまつわる事柄をここに紹介したい。



図1. 18歳ごろの大澤謙二。初めての留学を直前に控えた1870 (明治3) 年の撮影と思われる。写真の台紙には「帝国大学赤門前 Ichikawa」と印刷されており、「帝国大学」の名称が1886年から使用されたことから考えると、この写真は後の複製と考えられる。大澤雄三氏所蔵。

いくつかの写真

大澤謙二の自伝 (聞き書き) である『燈影蟲語』 (復刊、東大生理学同窓会編、1979) によれば、「二度目の洋行 [の船中には]、(中略) 丁度仏蘭西に万国博覧会があった時分だから、(中略)、鮫島公使も居れば、博覧会の総裁の松方さん、同審議官で久鬼隆一さん初め重なる博覧会係りの役人が大分に乗り込んで居 [り]、(中略) 其外文部省の連中で手島精一、西村貞氏なども矢張博覧会の係りで同行して居た。それから村岡範為、中川謙氏などは留学生の方面で」乗船していた (引用文中の鍵括弧内は引用者による注記、以下同様)。約40日後マルセーユ着 (その旅行記録が遺品中の『海上日記』である)。パリとベルリンに



図2. 若きエリートたち。1878年3月パリで撮影されたものと思われる（本文参照）。大澤謙二自筆の注記によれば、右から、大澤、西村貞、九鬼文部大書記官、中川謙、手島精一、村岡範為馳である。大澤雄三氏所蔵。

しばらく滞在後、「途中大抵の人には巴里で袂れて唯村岡範為馳と二人で」、シュトラスブルク大学初の日本人学生として彼の地に着いた。1878年4月初旬のことであった。遺品中に、パリで撮影された1枚の写真があるが（図2）、これは上記の旅程中のものであろう。

大澤はさっそく、「小児科でコーツ [Oswald Kohts] と云ふ」人の紹介で、「今では日本婆アさんと云う名が付いて居る、リーゼンゲルという人の所へ村岡と二人で下宿した」。東京大学医学部総理池田謙齋から大澤への手紙が1通のこざれているが、封筒の表書き（図3）から「リーゼンゲル夫人」の綴り (Madame Riedinger) と当時の住所がわかる。夫人の風貌は写真（図4）からうかがうことができる。

『公用備忘』と『日記』から

遺品中に、『公用備忘』（以下『備忘』と略）と題された黒い小型の薄い手帳があり、留学後約1年経った明治12年5月18日という日付から始まる。さらに、留学直後から帰国までの簡潔な日録が、青い小型の『日記一』、『日記二』、『日記三』、および無題の黒色の1冊、計4冊の手帳に記されている。これらの記録から、デーデルラインにまつわる事柄を抜き出してみたい。

『備忘』が作られたのは、『燈影蟲語』が言う「1年少し経つと文部省から留学生監督、外国教師雇入、書籍機械購入といふようなことを [年間1500円の報酬つきで] 囑托」されたことがきっかけであろう。『備忘』の冒頭には1879（明治12）年5月18日という日付の後に、「石黒 [忠恵東京大学医学部] 総理心得よりノ文部大輔ヨリ（中略）囑托セル事項並其

Herrn K. Osawa
bei Madame Riedinger
Pergamentgasse No. 14.
Strassburg. (Deutschland)

図3. 池田謙齋から大澤謙二にあてた手紙の封筒の表書き。大澤雄三氏所蔵。



図4. シュトラスブルクでの大澤謙二。大澤自筆の注記によれば、前列右からリーゼンゲル夫人、佐々木政吉、大澤、後列左端小金井良精。大澤雄三氏所蔵。

達書ノ写シヲ送り且金銀出納ヲ精々注意スベキ旨ヲ云来ル」とある。『備忘』や上記の日記類の随所に金銭出納の細かい記述がみられるのは、この「注意」のためとも考えられる。大澤は数日後の5月22日、田中不二麿文部大輔と石黒綜理心得に「承諾ノ旨ヲ云送」った。

まもなく『備忘』の1879年6月19日の項に、「池田〔謙斎〕綜理ヨリ（略）博物学教師雇入ニ付青木氏方エハ断送ルニ付二百三十円ニテ一人雇入ヲ言来ル」という一節があらわれる。これが、大澤とデーデルラインの縁のはじめかもしれない。文中の青木氏とは、ドイツ公使青木周蔵（後の外務大臣）と思われるが、「断り」とはなにか。『日記三』1879年4月11日の項に「昨夜ベルリンヨリ書ヲ得即チ東京大学医学部ヨリノ教師雇入約条書及池田ヨリノ氏及ヒ青木氏よりノ書（植物学教師ハ巳ニ伯林ニテ見当リ□）ナリ」（□は解説不能を示す）と記されていることと関連するように思われるが、詳細は未解明である。なお、文中の「教師雇入約条書」とは契約書のひな型であろう。

『備忘』の7月5日の項に、「ドラーデルライン氏と条約ヲ結ブ月給二百三拾五円年限二年ト定ム」とある。締結の日付、給与条件および任期は、当然のことながら、デーデルラインの曾孫が保管している契約書（西川・ショルツ、1999）とびたりと一致する。月給額が池田謙斎の指示よりも5円多くなっている理由は、以下でふれる。『備忘』には、この翌日池田に出した、契約成立を報告する手紙の控えが書き留められている。7月24日には、デーデルラインに300マルクを先払いした（7月26日に受領の返書があった）。さらに8月15日の項には、旅費2600マルク（前述の契約書は旅費を650円とする）と月給前渡1200マルク（先の300マルクと合算）を支払ったこと、およびデーデルラインが10月5日にマルセーユを船出することが記されている。さらに、池田あて、これらの支払いとデーデルラインの出発とを報じ、さらに「十一月十六日前後ニハ横浜港」に着く見込みを知らせる手紙を出したことが記されている。なお、デーデルラインが実際に横浜に上陸したのは、少し遅れて11月22日のことであった（磯野、1986）。

『備忘』にはこれ以降、デーデルラインの名前は、過去の旅費払いに関する帳簿上の問題への言及が1件見られるだけである。他方、東京大学医学部で教えていた「解剖学教師ドクトル ギールケ氏代員」として「ドクトル ジッセ氏」を、そして語学教師「ドクトル アードルグロート氏」を、それぞれ日本に送り込むことをはじめとして、書籍や機器類の調達など前記「嘱托」の仕事が次々にこなす大澤の姿がうかがわれる。1880年5月まで在任の「ギールケ氏」（Hans Paul Bernard Gierke）と、1880年2月来日の後任「ジッセ氏」（Joseph Hugo Vincenz Disse）の事蹟は、小関（1988）を参照されたい。「アードルグロート氏」とはAdolf Grothのことで、1880年11月末に来日し、東京大学予科で5年間ドイツ語とラテン語を教えた（西川・ショルツ、1999）。

デーデルラインとの契約交渉

大澤はデーデルラインとどのように知り合い、どのような交渉をしたのだろうか。『日記三』の1879年6月26日〔原文では5月とあるが明かに誤記〕のところに「本日Gerland氏ノ招ニ逢フDr.Döderlein 条約ノ義ニ付キ談ス」という記事が見られる。おそらくこの日はじめて二人は出会い、契約内容を相談したのであろう。デーデルラインは当時、シュトラスブルク大学で助手をつとめながら学位を取得した後、おなじアルザス地方にあるミュルハウゼン高校の補助教員をしていた（磯野、1986）。ミュルハウゼンは現在のミュルーズ（フランス）で、ストラスブールの南約100kmに位置する。二人を引き合わせたGerland氏とは、当時シュトラスブルク大学の地理学教授を務めていたGeorg Gerlandと思われる。彼が紹介者の役をつとめたことはデーデルラインがミュルハウゼンから両親に送った1879年6月29日

付けの手紙によってすでに判明していたが (Scholz & Nishikawa, 1999)、大澤の日記から今回それが裏付けられたわけである。この手紙では、Gerland教授の誘いをうけてシュトラスブルクに出向き、ある日本人と会って招聘内容の詳細について話を聞いたが、日本に行くかどうかの決定はまわりの人達の意見を聞いてからにしたい旨が述べられていた。

大澤とデーデルラインは、翌6月27日にも会っている。同日の『日記三』には、「本日モ Dr.Döderlein ト話ス用シ談未タ宜ク整ワス」とあり、この日は相談がうまくまとまらなかったことが判る。7月3日には「Döderlein氏ヨリ月給ヲ増シ且ツ帰程旅費ハ必ス払フベシト条約文ヲ変セン事ヲ書送ル其返書ス」とあり、翌4日には「本日Döderlein氏ヨリ書来ル」が、これ以上の詳細は書き残されていない。ともあれ、翌5日（前記『備忘』の日付と一致）に「本日Döderlein氏ト条約ヲ結ブ」ことになった。

デーデルラインの申し出のうち月給増額については、前述したとおり5円で決着したことになる。他方、現存する契約書 (Scholz & Nishikawa, 1999) には往路旅費650円を1円銀貨で前渡することは記されているが (第2条)、帰路旅費についてどうか。怠業などによって契約義務を遵守しない時や本人の都合で契約を途中で打ち切る時には帰路旅費は支払わないこと (7条、10条)、および医学部側が帰路旅費を支払って任期未了のまま解雇する場合があること (8-9条) が記されているだけで、任期满了時の帰路旅費支給は明示されていない。これは、ほぼ同時期に結ばれたE.S.モースの契約書 (磯野、1985) が全体としてデーデルラインのそれとおおよそ同じ内容であるうえ、前者の第10条に「本契約に基づく契約期間が終了したとき (中略) 帰国費用 (中略) の支払いを受ける」と明記されているのと対照的である。このあたりが、デーデルラインの先の「帰程旅費ハ必ス払フベシト条約文ヲ変セン事」という申し出につながったのだとすれば、現存する契約書から見ると、彼の申し出は受け入れられなかったことになる。ただし、実際には、デーデルラインは無事任期を満了後、往路と同額の旅費650円を受け取って帰路についた (磯野、1986)。

なお、『日記三』にはこの後、デーデルラインへの月給や旅費の前渡しが記録されているが、その内容は前述の『備忘』の記事と完全に一致している。

大澤とゲルランド

Gerland教授が大澤にデーデルラインを紹介したことはすでに述べた。Gerland教授は地理学者であり、もちろん大澤とは畑違いである。二人はどのような間柄だったのだろうか。

『日記一』によると、シュトラスブルク到着後まもなくの1878年5月6日には、「午後Prof. Gerlandヲ訪ヒ帰宅ス」とある。そこにいたるまでの経緯は不詳だが、遅くともこのあたりから二人の交流が始まるわけである。その後も『日記一』や『日記三』には、日曜日に大澤がGerlandを訪問したり、招待を受けたり、来信があったりなど数件の記述があるから、ある程度親しい間柄であったことが推測される。そのような信頼関係のなかで、おそらく大澤はGerlandに人選を依頼したのであろう。こうして東京大学医学部はひとりの若く優秀な生物学者を教師として迎えることになったのである。

謝 辞

大澤謙二のお孫さんである大澤雄三氏は、遺品調査を快諾して種々便宜をはかってくださり、また所蔵資料や小文の公表をご許可いただいた。そのご好意に心から感謝する。また、調査をご援助いただいた東京大学医学部・医学系研究科庶務掛長早乙女豊氏、小文発表の機会を与えて下さった東京大学史史料室の故中野実氏、および英文要約を校閲してい

ただいたEdward B. Cutler博士にお礼を申しあげる。本研究には文部省および日本学術振興会科学研究費補助金（それぞれ、No. 09041155およびNo. 12575008）の援助をえた。

文 献

- 磯野直秀 1985 エドワード・S・モースの契約書. 慶応義塾大学日吉紀要、自然科学、1: 63-68.
- 磯野直秀 1986 お雇いドイツ人博物学教師. 慶応義塾大学日吉紀要、自然科学、2:24-47.
- 磯野直秀 (訳) 1988 日本の動物相の研究：江ノ島と相模湾 ルートウィッヒ・デーデルライン. 慶応義塾大学日吉紀要、自然科学、4:72-85.
- 小関恒雄 1988 デーニツ、ティーゲルとディッセル—東京大学医学部の少壮エリート教師たち— In: 宗田一他編、“医学近代化と来日外国人”, 世界保健通信社、大阪、pp. 96-100.
- クライナー、J・田畑千秋 1992 ドイツ人のみた明治の奄美 ひるぎ社、那覇、226pp.
- 西川輝昭 1998 デーデルライン・コレクションを訪ねて. 遺伝, 52(4):78-82.
- Nishikawa, T. (ed.) 1999 Preliminary taxonomic and historical studies on Prof. Ludwig Döderlein's collection of Japanese animals made in 1880-81 and deposited at several European museums. Graduate School of Human Informatics, Nagoya University, Nagoya, Japan. 266 pp.
- 西川輝昭・ショルツ、J. 1999 ランダウの街で—デーデルラインの曾孫との出会い. 遺伝, 53(4):66-68.
- Scholz, J. & T. Nishikawa 1999 Enroute to Japan: Kenji Osawa and Ludwig Döderlein's 1879 contract. In: Nishikawa, T. (ed.), "Preliminary taxonomic and historical studies on Prof. Ludwig Döderlein's collection of Japanese animals made in 1880-81 and deposited at several European museums", pp. 169-181.
- 東大生理学同窓会編 1979 復刊『燈影蟲語』(付解説)、同同窓会、東京、ページ付けなしの図版・目次・前書・序+73 pp.
- 上野益三 1982 薩摩博物学史 島津出版会、東京、317+11+13 pp.
(にしかわ てるあき 名古屋大学博物館)

Relations in 1879 between Drs. Kenji Osawa and Ludwig Döderlein,
as viewed from Osawa's diary and memoranda

Teruaki Nishikawa (The Nagoya University Museum)

Dr. Kenji Osawa [=Oosawa] (1852-1926), a distinguished professor in the Medical School of the Imperial University of Tokyo, and for some period its president, is well known as the founder of physiology in modern Japan. During his stay at the University of Strassburg for doctoral studies supervised by Prof. Friedrich Leopold Goltz, Osawa contacted a German biologist Dr. Ludwig Heinrich Philipp Döderlein (1855-1936). The reason for this contact was to invite him to the University of Tokyo for 2 years beginning in November 1879 as a professor of natural history at the Preparatory Course of the Medical Department. Newly examined documents (Osawa's diary and memoranda) kept

by his grandson Mr. Yuzo Osawa in Yokohama revealed some details of relations and negotiations between them in 1879.

These contacts were prompted by a request made by Dr. Kensai Ikeda, Dean of the Medical Department to look for that kind of professor, recorded in the memorandum dated 19 June 1879. On 26 June Osawa first met Döderlein through an introduction by Dr. Georg Gerland, Professor of Geography in the University of Strassburg. From Osawa's documents his friendly relationship with Gerland can be imagined since 6 May 1878, soon after Osawa began to live in Strassburg (now Strasbourg in Alsace, France). Osawa met Döderlein several times to negotiate about the terms of payment until Döderlein signed the contract on 5 July 1879. Thus, the University of Tokyo could have the young and talented professor, who subsequently made a large contribution to the better understanding of marine biodiversity and to the advancement in marine biology in Japan.